

お知らせ

■TJFの事業を支えてくださっている皆さま

TJFは皆さまからご協力・ご支援を仰いで事業を行っております。1～3月は以下の方々からご寄附をいただき、コラボレーターの登録がありました。

○一般寄附金

奥間幸子 様 奥間さつき 様 奥間正英 様 須田美知子 様
とわの森三愛高等学校 様 福田美知子 様 森慶介 様

○コラボレーター

梅澤侑加 様 「何ができるかわかりませんが、時間があるときにお手伝いさせていただきます。自分にできることは頑張ります」
土田芳雄 様 「中学、高校の中国語や英語の会話の補助や手助けなどをしたいと思っています。必要な学校や学生がいたら紹介してください」

■80時間のコラボが生まれました

昨年4月に新設した「コラボレーター制度」には、現在25名の方々に登録していただいております。日中高校生サマーキャンプの旅のしおり作成、好朋友webの中文翻訳チェック、中国への校長派遣プ

ログラムの広報、来日した黒龍江省教育代表団のアテンド・通訳など、2012年度は、のべ80時間のコラボレーションが生まれました。皆さまのご支援・ご協力に対して心より感謝いたします。引き続き、コラボレーターを募集しています。詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。

▶www.tjf.or.jp/jp/collabo

■めざせ! facebookファン1,000人

TJFの公式facebookで、「心のこもった事業運営」をお伝えするため、日々のエピソードを発信しています。

先日初めて、1週間の記事へのアクセス数が1,000件を突破しました。TJFの事業をもっと多くの方々に知っていただくため、これからも楽しい話題や感動的な出来事をつづっていきます。

「2013年度はTJFページのファンを1,000人獲得します!」

先日、会議でそう宣言してしまいました……。現在のファンは244人です。引き続き、応援をよろしくお願いいたします。

▶www.facebook.com/TheJapanForum

(藤掛敏也)

レポート

広報事業

さまざまな「りんご」エピソード

3月11日(月)の夕方、TJFの活動に興味をもってくださっている方々を事務所にお招きして、カレーパーティを開催しました。カレー好きのスタッフが手作りして持ち寄ったのは、南インドのホウレン草カレー、豚の角煮カレー、完熟トマト&チキンカレー、ドライカレーなど実にさまざま。カレーという同じ名前の料理の、それぞれにまったく異なる味わいをとてもおもしろく感じつつ堪能しました。

参加者には自己紹介をかねて、「私のりんごは、○○です」というテーマで、自分のりんご(=隣語。お隣のことば・外国語、大切なことば)にまつわるエピソードやことばへの思いなどを披露してもらいました。りんごとして挙げられたのは、タミル語、ロシア語、中国語、韓国語、タイ語、さらには日本語、大阪弁、うちなーぐちまで。「高校のときに出会った中国語が自分の視野を広げることになった」「生徒に英語を教えているが、英語というよりもことばを教えていると思っている。

生徒には、ことばが人をつくり、ことばが人を支えるのだと話している」「仕事でいろいろな国に行きましたが、好きなことばは『再見』『ダスピダーニャ』、つまりいろんなことばでの『また会いましょう!』などと、心温まるお話を聞くことができました。

これからも、皆さまに事務所に気軽に集まっていただけるようイベントを開催していきます。イベント情報はfacebookでいち早くお知らせしますので、TJF公式facebookの「いいね!」を押して、情報入手してください!

(藤掛敏也)

いろいろなりんごが実りました



マンガを描いて見せながら道具の使い方を説明する明德義塾高校マンガ部の生徒。「高校生マンガアーティスト」にメナーシャの生徒たちの目は釘づけだった。



海外の日本語教育促進事業

日米の高校生がマンガを通じて交流

米国ウィスコンシン州メナーシャ市の公立小学校、中学校、高校で日本語が学べるようになって今年で20年を迎えました。それを記念して、2月2日から2週間、明德義塾高校マンガ部に所属する生徒2人と若手マンガ家がメナーシャに招聘されました。また、2月13日の夕方にはメナーシャ高校の図書館で市民向けの公開イベントが行われました。これらはTJFが2011年から3年度にわたり(株)講談社から提供していただいている野間佐和子記念寄附金によって実現しました。

メナーシャでは、子どもたちが少しでも目を外に向け、世界とのつながりを実感しながら育つようにと、地域をあげて外国語教育に力を入れてきました。幼稚園年長から小学6年生まではスペイン語、ドイツ語、日本語のいずれかを必修とし、その後も選択科目として高校3年まで学ぶことができます。日本語履修者は全体の3分の1を占めています。母語(英語)以外のことを一度も学ぶことなく育つ人が多い米国で、なかでも欧州系のルーツをもつ住民が圧倒的に多い中西部地域にあっては、めずらしい環境といえます。

■マンガクラブが発足

日本語を学んでいても日常生活で実際に話す機会がほとんどないため、日本の中学校や高校との交流を増やすことがメナーシャで日本語を教える教員たちの長年の願いでした。交流といっても自己紹介をしあって終わるような表面的なものではなく、生徒が夢中になり自発的に交流を続けたいような内容にしたいと、昨年春、TJFの仲介で高知県の明德義塾高校マンガ部に交流を申し込みました。

秋にはメナーシャ高校のマンガクラブが発足し、明德義塾高校のマンガ部に遠隔「入部」という形で交流が始まりました。メナーシャ側の部長は、日本語を学びたくて隣の学区から越境通学している熱心な生徒です。日本から「高校生マンガアーティスト」がやってくるというニュースが校内で知れわたると、日本語を学んだことのない生徒までが関心を示し、マンガクラブに出入りして日本語や日本の文化にふれるようになりました。

■マンガを描き手の視点で見る

明德義塾高校マンガ部員2人と、同部を指導しているマンガ家がやってきた2週間、中学校と高校で日本語を学んでいる生徒約200人が、Gペンやスクリーン

メナーシャ高校の生徒が描いたオリジナルキャラクター。



トーンといったマンガ専用の道具の使い方を教わり、「オリジナルキャラクターを描こう!」という課題に取り組みました。マンガ家の指導を受け、日本の高校生に手伝ってもらいながら、自分で考えたストーリーのキャラクターを1枚の紙に表現しました。

「日本の高校生は、すごく英語がうまいわけではなかったけれど、話しかけてきてくれたし、お互い何とかわかり合えた」「マンガってひとコマずつ手で描いているんだと気づいた。登場人物の同じ顔を1ページに何回も描くのだからすごい」「ひとつの作品にとれだけの手間がかかっているか知って驚いた」

生徒の感想から、同年代の日本人とコミュニケーションして自信を深め、また、これまで読むだけだったマンガを描き手の側から初めて見て、物事を見る目が変わっていった様子が伝わってきます。明德義塾高校の生徒はノートにさらさらと絵を描き、周りの生徒たちの賞賛を集めていました。またキャラクターづくりに一緒に取り組むなかで自然に教室に溶け込み、友だちを増やしていました。

■交流活動の作品を市庁舎に展示

生徒たちだけではなくメナーシャの市民にも日本からのゲストとの交流を楽しんでもらおうと、高校の図書館を会場にして一般公開イベントも行われました。生徒が描きあげたキャラクターの絵を展示し、日本文化体験コーナー(日本食とお菓子、折り紙、マンガ描き)を設けた会場は、100人近くの来場者で賑わいました。日本語教育を実施している小学校、中学校、高校の校長や教員はもちろん、近隣の大学の日本語教育関係者も来場しました。

開会式では市長が明德義塾高校からマンガを教えに来てくれた3人に感謝状を贈呈し、メナーシャで20年にわたって日本語と日本文化に親しむ教育が行われてきたことは市にとって大きな財産だとスピーチしました。また、今回の交流を市民に紹介するため、キャ



市民公開イベントの日は、生徒がコスプレをして登校する「コスチューム・デイ」という学校行事の日でもあった。日本のマンガ『BLACK CAT』の登場人物セフィアにそっくりな衣装を自作した生徒は、一緒につくってくれた祖母をイベントに招いた(写真左)。浴衣(写真中)や日本の制服風コスチュームの生徒(写真右)もいた。

ラクターの絵を市庁舎に掲示したいとの申し出にメナーシャ高校の生徒は大興奮でした。

会場には、日本語を開講してからの20年間で写真で振り返るパネルと、日本語を学んで卒業した先輩たちから寄せられたたくさんのメッセージが掲示され、多くの参加者が立ち止まって見ていました。メナーシャでは公立学校の運営に市民の声が大きく反映されます。日本語など外国語は主要教科ではないため、メナーシャのように素晴らしいカリキュラムと実績をもっていても、地域の人たちの理解がなければ、授業時間が削減されたり、必修から外されたりする可能性があります。国や州の財政難、政策の変化により、教師が減らされかねない環境のなかで、日本語教育がどのように地域の役に立っているかをわかりやすく示すことが求められています。

明德義塾高校とは今後も交流を続け、メナーシャ市は1年後にまた生徒を招聘する予定です。TJFにとって今年は、2011年から3年計画で実施してきたメナーシャ市の日本語教育への協力の最終年度にあたります。日々全力で生徒と向かい合い、子どもたちを世界につなげるための教育に尽力しているメナーシャの教育関係者をTJFは引き続き支援していきます。(安藤まどか)

日韓中高校生交流プログラム

K-POPを韓国の高校生と踊ろう!

日本の中高生が韓国の高校生とK-POPダンスで交流しながら韓国語を学ぶプログラムが、TJFと韓国・秀林文化財団との共催で3月28日(木)から5日間、ソウルで初めて行われました。参加者は全国に公募しましたが、東京で実施する3回の事前研修と帰国後の報告会に自費で参加することが条件になっているため、応募者は関東在住の中高生が大半を占めるだろうと予測していました。ところが、北海道、山形、石川、大阪、長崎など全国各地から参加希望があり、当初は定員6人の予定でしたが、応募者の熱意に圧倒され、3人増員して9人のメンバーとなりました。

参加が決まった長崎県対馬高校1年生の蓮田なつみさんは、事前研修のたびに対馬からフェリーと夜行バスで14時間以上かけてやってきました。対馬なら釜山まですぐに行けるのに、どうしてお金と時間をかけてこのプログラムに参加しようと思ったのか尋ねてみると、

「K-POPダンスを韓国の高校生と一緒に踊れる機会はほかにはないから」と答えが返ってきました。韓国のアイドルユニットSuper Juniorが大好きな彼女は、韓国語を学びたくて、熊本の自宅を離れ、韓国語コースのある対馬高校に進学しました。今回の参加にかかる費用は将来働いて返すからと両親を説得して出してもらったそうです。

金沢に住む中学3年生の西野菜々美さんもSuper Juniorが大好きで、ライブに行ったのがきっかけで、3年前から韓国語を近所の人に個人的に教えてもらっています。

高校2年までダンス部に所属していた荒木さくらさんは、「No Dance, No Life」というほどダンス好きです。みんなでK-POPダンスを踊ることに加え、ホームステイが楽しみで、韓国に家族をつくりたいと語っていました。

志望の動機はさまざまですが、みんなに共通していたのは、韓国の高校生と交流したい、一緒にダンスをしてみたい、韓国の文化にふれてみたいという気持ちでした。

事前研修で一体感UP!

このプログラムでは、日本側の参加者9人と、韓国側で参加する光新高校の1年生、2年生の9人が二つの混成チームに分かれ、K-POPのダンスユニット「少女時代」の新曲「I got a boy」を一緒に踊ります。息の合ったダンスをするには、ダンスの練習はもちろん、日韓の高校生がコミュニケーションを深め、チームとして一体感をもつことが必要だと考え、事前研修を3回設定しました。

第1回事前研修では、日本の生徒9人がA3判の用紙に自分の名前や学年、出身地、趣味や好きなK-POPアイドルなどを、写真の切り抜きやイラストも入れて韓国語で書き込みました。そして光新高校の生徒に向け、このシートを手にした自己紹介のビデオレターを作成しました。



自己紹介シートを真剣な表情でつくる。

優勝したAチームの、
帽子を投げて決めポーズ。



第2回の事前研修では、光新高校の生徒が作成した自己紹介シートとビデオレターを見たあと、課題曲のダンスの練習を始めました。ダンス部に所属している生徒が中心となって、練習内容や方法を自分たちで決め、一人ひとりに「少女時代」のメンバー9人の役割を振って、ミュージックビデオを見ながら1時間ほど汗を流しました。

最後の事前研修では、前回に引き続きダンスの練習をしたあと、各自の目標を決めました。模造紙の真ん中に自分のイラストを描き、その周りに「韓国語」「ダンス」「ショッピング」「ホームステイ」「交流」の5項目についてそれぞれの目標を書き込みました。「韓国語」の目標には「一日3回以上話しかける」「新しい単語を20以上は覚える」、「ダンス」の目標には「お互いに教えたり教わったりする」などが書き込まれていました。

いよいよ、ダンス! ダンス! ダンス!

3月28日(木)アジアナ航空の協力を得て、韓国金浦空港に降り立った9人は、入国の第一歩から、憧れの地に着いた興奮にあふれていました。国立ソウル大学言語教育院の協力によるダンスや買い物、ホームステイに必要な韓国語を学ぶ3回の授業、光新高校でのチーム分け、ダンス練習、さらにはホームステイと瞬間に日程が過ぎてゆきます。

Aチームのメンバーは、西野菜々美さん、이주영(イジュヨン)さん、山下美誓さん、박소영(パクソヨン)さん、이신영(イシンヨン)さん、鄭世任さん、유지수(ユジス)さん、노세미(ノセミ)さん、荒木さくらさんの9人。みんなで決めたチーム名は、「5SJYMAN」。みんなのイニシャルをとって名付けました。一方、양인서(ヤンインソ)さん、蓮田なつみさん、황수경(ファンスギョン)さん、服部芽衣さん、三浦映那さん、나수빈(ナスビン)さん、山川友梨子さん、高橋未夢さん、이재희(イジェヒ)さんの9人をメンバーとするBチームは、各自が一案ずつ名前を考え、くじ引きで決めることにしました。チームリーダーが引いた紙に書かれていたのは、山川さんが提案した「JK시대(時代)」。JAPANとKOREAの頭文字JKに、女子高生のJKを重ね合わせて、「少女時代」になぞらえたものです。

ダンス対決当日の31日(日)は、前夜ホームステイで遅くまで楽しんだ疲れも見せず、東大門にあるファッションビル・ミリオレに集合しました。「少女時代」の同じ役を踊るABチームの2人がペアとなり、もう

ひとつの企画「ファッション対決」用の買い物に知恵を絞りました。

「ファッション対決」では、ミリオレで買ったTシャツや帽子、アクセサリーなどペアで決めたおしゃれのポイントを、「決めポーズ」とともに披露しました。

会場の観客による投票の結果、優勝は「少女時代 玄연(ヒョヨン)役」の2人、荒木さんとイジェヒさんのペアに決まりました。インタビューでおしゃれのポイントはと聞かれた2人は、「デニムの青に帽子やカチューシャの赤をあわせたところ」と日本語と韓国語で答えました。受賞後の感想で、イジェヒさんが韓国語で「うれしすぎて死んでしまいそうだ」と喜びを表わしたあと、荒木さんも韓国語で「정말 기쁩니다. 감사합니다(本当にうれしかったです。ありがとうございます)」とあいさつしました。

そしていよいよダンス対決。合同で練習した時間はわずかでした

プログラムを報道した新聞に見入る高校生。



K팝 마니아 인본 여고생 9명 '서울에서 댄스 댄스 댄스'

한일 중·고교 교류 프로그램
중추부 주최·수행



9명의 여고생들이 서울에서 K-pop 춤을 배우고 있다. 이들은 'JK시대'라는 팀명으로 댄스 대결을 펼칠 예정이다. 이번 교류 프로그램은 중추부 주최로 진행되는 것으로, 한국과 일본의 중·고교생들이 서로의 문화를 이해하고 교류하는 기회를 제공한다. 이번 교류 프로그램은 중추부 주최로 진행되는 것으로, 한국과 일본의 중·고교생들이 서로의 문화를 이해하고 교류하는 기회를 제공한다.

이들은 'JK시대'라는 팀명으로 댄스 대결을 펼칠 예정이다. 이번 교류 프로그램은 중추부 주최로 진행되는 것으로, 한국과 일본의 중·고교생들이 서로의 문화를 이해하고 교류하는 기회를 제공한다.

韓国日報の記事。Bチームのダンスの写真が掲載された。

が、両チームとも表現力豊かで、キレのある踊りを見せてくれました。少し緊張感の残るBチームに比べ、赤い帽子を投げるパフォーマンスのインパクトとやや笑顔が勝ったAチームがわずかの差で勝利しました。受賞インタビューでも、Bチームよりよかったところは「帽子」と答えて会場の納得を得ていました。

翌日の「韓国日報」には「K팝 마니아 일본 여고생9명 ‘서울에서 댄스 댄스 댄스’(K-POPマニア日本女子高生9名‘ソウルでダンスダンスダンス’)」という見出しで、社会面に写真入りで報道されました。帰国の日、バスのなかでうれしそうに新聞を広げる9人の姿が印象的でした。

「ダンス対決」の様子はTJFのfacebookでも紹介していますので、ぜひご覧ください。

▶ www.facebook.com/TheJapanForum

TJFは2013年度も参加人数を拡大してこのプログラムを実施する予定です。詳細が決まり次第、TJFのウェブサイトで告知するほか、メルマガに登録されている方々にお知らせします。

メルマガの登録はRingoウェブサイトのトップページから。

▶ www.tjf.or.jp/ringo (中野敦)

中高生のための韓国語講座

「同世代の韓国の中高生と交流したい」を実現!

学校に韓国語の講座がない生徒を対象に、TJFは駐日韓国文化院、同世宗学堂と共催で「中高生のための韓国語講座」を2010年度から毎年開講しています。TJFは講師と協力して、週1回90分、全24回のコースのカリキュラムをつくっています。講座の開始前に、参加者に韓国語を勉強して何がしたいのか、何ができるようになったのか聞いたところ、ほぼ全員が「同世代の韓国の友だちをつくって話ができるようになりたい」と回答しました。そこで2012年度は、韓国の高校生を招待し、交流会を実施することを最終的な目標に据えました。さらに、韓国に関する作文を書いてコンテストに応募すること、韓国語のスキットを練習して「話してみよう韓国語」コンテストに参加することも目標に掲げました。1年間を通じて、具体的な目標を複数設定することで、学習意欲が高まるのではないかと考えたからです。まず開講後は9月締め切りの作文提出に向けて、その後は、1月に行われる「話してみよう韓国語」のスキット部門の発表に向けて授業を組み立てていきました。そして、講座最終日の3月9日(土)、東京韓国学校の生徒がつくる日韓交流・韓国語教育サークル「シナブロ」のメンバーを招いて交流会を実施しました。

交流会は、①自己紹介、②一緒に楽しもう(イントロクイズ、ダンスイントロクイズ、K-POPミュージックビデオ鑑賞)、③プレゼント交換の3部構成にし、お茶やお菓子の買い出しを担当するチーム、イントロゲームをつくるチーム、K-POPのミュージックビデオを用意するチームに分かれ、全体の構成をつくりあげていきました。

盛りが上がった交流会

いよいよ交流会当日。自己紹介はみんなの前で一人ずつ順番にするのではなく、近くの人同士で一斉に行いました。緊張させず、すぐに打ち解けてもらうためでした。イントロゲームでは、どの曲にもすぐに複数の手が挙がり、用意していた10曲はあっという間に終わってしまい、K-POPの人気を改めて感じました。そしてもっとも盛り上がったのが、ダンスイントロクイズです。ダンスの得意な生徒3人が、曲のイントロのダンスを踊り、曲名をあてるゲームです。5曲のダンスで、会場は多に沸きました。ダンスのうまさと同時に、そのダンスを見て、どのグループの何の曲かがすぐにわかる高校生たちばかりで、とても驚きました。

招待された生徒、招待した生徒双方から、「楽しかった! また会いたい」「自分たちの文化に関心をもってくれてうれしかった」と熱い歓びの声が飛び交い、最後に、「シナブロ」の代表から、「今度は私たちが招待します」と力強い提案が出されました。

交流会後、韓国語講座の生徒からは、「韓国や韓国語についてもっと知りたい」「相手は日本語がべらべらだった。私もがんばってもっと話せるようになりたい」という声が多くあがり、コース最終日に、学習意欲の強い高まりを感じることができました。具体的な目標に向けて学習を進めたこと、同世代と交流したことの成果だったのではないかと思います。どうしたら講座終了後も学習のモチベーションを維持させ、高めることができるのかを課題としてきた私にとってとてもうれしいことでした。今後もよりよいカリキュラムづくりに参画していきたいと考えています。(中野敦)

外国語教育促進事業

3月は外国語教育を考える月

「3月3日を外国語の日にするのはどうか」。昨年(2012年)の3月3日、TJFが上智大学国際言語情報研究所と共催したシンポジウムの席上でこの提案されました。その日から1年を経た3月2日(土)、昨年と同じ会場の上智大学で「外国語教育の未来(あす)を拓く」と題したシンポジウムが、一般社団法人日本外国語教育推進機構(JACTFL)と上智大学国際言語情報研究所の共催で開催されました。

吉田、當作両氏が発表のなかで「外国語学習のめやす」についてふれたためか、市販開始以来最高の61冊を販売。



JACTFLは、さまざまな言語、教育段階の垣根を超えて外国語教育関係者が連携、協力し、日本の外国語教育が長年抱えてきた課題を解決するために、①多様な外国語教育関係学会・団体を横断的に結びつけ、連携・協力を図る組織をつくる、②多様な外国語教育に係る活動についての情報を幅広く提供する場を設ける、③中等教育、特に高等学校における多様な外国語教育の普及を制度的に推進する、ことをめざして、2012年12月3日に設立された組織です。

誕生したばかりの組織が第一弾の活動として開催したシンポジウムは、申し込みを断らなければならぬほど関心を集め、当日の会場は200名をはるかに超える参加者で埋まりました。

午前中の基調講演者のひとりだった、吉田研作上智大学教授は、帰国子女が多いクラスに参加した日本育ちの英語学習者が自信を喪失している姿を、世界の国に比べて英語力が低いといわれている日本の姿に重ねあわせて、「自分も持っている力をどうやって生かすのかが問われている。自分を比較するのは他人ではなく自分自身。自分がやろうとしていることをとれだけできるようになるかが大切だ」と熱く語りました。続いて登壇した當作靖彦カリフォルニア大学サンディエゴ校教授は、21世紀の言語教育の理念は、人間形成のための総合的能力の開発であり、それに伴い外国語教育のアプローチは、「何」を教えるかから「どう」教えるかを経て、「なぜ」学ぶかを重視すべきであると強調しました。また、すでに研究等により実証されている数々の外国語学習のメリット——認知能力の発達、短期記憶の向上、創造性の向上、母語、読解、作文、数学の各能力向上等をもっとアピールしなければならないと主張しました。

午後は、境一三(慶應義塾大学、ドイツ語教育)、迫田久美子(国立外国語教育研究所、日本語教育)、長谷川由起子(九州産業大学、韓国語教育)、立花英裕(早稲田大学、フランス語教育)、村上公一(早稲田大学、中国語教育)、森住衛(桜美林大学、英語教育・言語政策)の各氏がパネリストとなり、それぞれの立場から、外国語教育の意味やJACTFLに対する期待を述べました。

どの発表も示唆に富むものでしたが、特に村上氏と境氏の発表に共感を覚えました。村上氏は各言語の関係者間で、教育方法や学習の場、成果を共有し、協働して教材開発等に取り組むことを提案しました。境氏は日本社会における「共生の(ための)言語教育」の観点から、異なる言語・文化をもつ隣人が増えつつある日本社会で、さまざまな人びとが平和共存できるコミュニティを形成するための言語教育や、(マイノリティーを含めた)他者、他言語、他文化への「気づき」と「自己の開き」に重点をおいた教育を推進する必要があると論じました。

パネルディスカッション終了後には、15人程度のグループに分かれ、自分が考える外国語学習の意義、日ごろ感じている課題、課題

を解決するための提案などを語る時間が設けられました。その時間に出されたコメントの一部を紹介します。

▶これまで長い間、語学教育(フランス語)を行ってきたが、他の言語の教員の方々と連携をとることはなかったので、大変有意義な機会を得ることができた。

▶英語以外の外国語の大切さが言われるようになって何年にもなるが、英語以外の外国語が開講されている私の勤務校も進学校なので、依然として英語重視である。学校現場との温度差を感じる。

▶論理性をもった発信力、表現力に欠ける学生が多いのは、外国語を学ぶ前の母語教育としての日本語教育の段階で、それらの力が身に付いていないからである。国語教育との連携が必須である。

大いに刺激され、パワーをもらうと同時に、シンポジウムの参加者として、これからの日本の外国語教育を変えていく担い手のひとりになりたいと考えた一日でした。

シンポジウムの基調講演、パネリストの発表資料は、JACTFL会員専用ページで公開されています。詳しくはwww.jactfl.or.jpをご覧ください。(水口景子)

2013年1月・2月・3月

ほかにこんな活動をしました

- 『国際文化フォーラム通信』no.97「〈考える〉を刺激する」を発行 [1月]
- 『外国語学習のめやす 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』(市販版)を発行 [1月]
- 第30回全日本中国語スピーチコンテスト全国大会(日本中国友好協会主催)を後援し、優秀な成績を修めた高校生に国際文化フォーラム賞として賞状と副賞(図書券)を授与するとともに、参加賞として書籍(『中国語はおもしろい』新井一二三/講談社刊)を寄贈 [1月/東京]
- 「話してみよう韓国語」地方大会を後援し、各大会で優秀な成績を修めた高校生に副賞として図書券を寄贈 [1月/名古屋、東京中高生大会、2月/新潟]
- 日本情報発信サイト「くりっくにっぽん」韓国語版をオープン [3月]
- クムホ・アジアナ杯「話してみよう韓国語」高校生大会に協力 [3月/東京]
- 「外国語学習のめやす」実践ワークショップをJAKEHSと共催 [3月/東京]

掲示板

『外国語学習のめやす』(市販版)、好評発売中!

『外国語学習のめやす 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』は、発売からわずか3ヵ月で、英語や日本語をはじめさまざまな言語を教えている方々に購入していただいています。教職課程の教科書として活用されている大学の教員もいらっしゃいます。

本冊子は、書店では取り扱っておりませんので、以下の方法でお求めください。

(1) TJFの学習のめやすウェブサイトから

▶ www.tjf.or.jp/meyasu

「Webで注文」をクリックして、お申し込みフォームに必要事項をご記入のうえ送信してください。税込1,000円(送料別)です。

『外国語学習のめやす』
— 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言 —
販売中

CanDo指標が別冊に!

サンプルを読む <本編> サンプルを読む <別冊>

販売スケジュール Webで注文

内容、ご購入のお問い合わせは shop.tjf.or.jp まで

3分でわかる「学習のめやす」(Youtube)

実践者の声
「社会とつながったことばの学び」
神奈川県立鶴見総合高等学校 山下 麗 (FLV 10.8MB)

実践者の声
「自分で考える生徒をつくる」
埼玉県立伊奈学園総合高等学校 藤井 達也 (FLV 10.8MB)

授業で使いたい人は
実践サポート
めやすWeb

(2) 学会・セミナー等の会場で

言語教育関連の学会などでTJFスタッフが販売しています。販売を予定しているイベントは左記ウェブサイトの「販売スケジュール」でお知らせしています。特別価格900円(税込)でお求めいただけます。

また、「送料タダ!」になる専用の払込取扱票付きチラシもあわせて会場で配付しています。あとで注文される方、友人や知人にも薦めたいという方はぜひお持ち帰りください。価格は税込1,000円です。

ウェブサイトでは、冊子の一部をe-bookでご覧いただけます。また、ユーザーの声も動画で配信しています。授業で活用されたい方は、「実践サポートめやすWeb」をぜひご覧ください。

『くりっくにっぽん韓国語版がオープンしました!』

人の内面に迫り、さまざまな人の姿を伝える「くりっくにっぽん」ウェブサイトが、日本語、英語、中国語に加え、新たに韓国語でも読めるようになりました。日本人びとや日本で話題になっていることに興味のある方、韓国語を勉強している方は、ぜひご覧ください。

▶ www.tjf.or.jp/clicknippon/ko

MyWay YourWay

Click Nippon

日本語
英語
中国語
韓国語

MyWay YourWay

Click Nippon

韓国語

MyWay YourWay

Click Nippon

韓国語

●中国東北三省から来日した5名の先生方は、さいたま市北浦和にある国際交流基金日本語教育センターに泊まり込み、『好朋友』のカリキュラム作成に取り組みました。現在、先生方が授業で大事にしていること、授業の工夫や苦労を共有しながら、日本語教育の意義を再確認し、カリキュラムづくりの方法についても考えました。

●期間中ファシリテーターの役割を果たしてくれたのは中新井綾子さんと武田育恵さんです。中新井さんは『好朋友』の編集委員のひとりでもあり、TJFが開催する中国での日本語教師研修会の講師を毎年務めています。武田さんは、大学時代の恩師である加納陸人先生から『好朋友』を紹介されたことがきっかけで、この教科書で教えてみたいと思うようになり、大連市の弘文中学で今年1月まで3年間日本語を教えていました。加えて、『好朋友』を使っている大連の先生方の良き相談相手でもありました。

●センターでの研修だけでなく、外出先も学びの場となりました。トマトチーズ鍋をはじめいろいろな鍋が載っているレストランのメニューを手にした白先生は、「このメニューから、日本語のなかの外来語が学べるだけでなく、今の日本の食について生徒たちに気づかせることがたくさんあります」といいます。先輩先生の姿を見て、どんなものでも教材になりうることに気づいた若手の先生方のパンフレット集めが始まりました。横浜の中学で見た生徒のノートにヒントを得た王先生は、今学期から日本語の授業でノートの取り

方を提示してみようと決めました。

●先日、インターナショナルスクールで日本語・文化の授業を教えていらっしゃる先生を講師にお願いしTJFで勉強会を開きました。この先生は、21世紀型スキルの育成を目標に掲げ、プロジェクト型学習を授業に取り入れています。勉強会にはスタッフのほかに、「学習のめやす」や「OTOプロジェクト」など、TJFのさまざまなプロジェクトに関わってくださる方々にも集まってもらいました。

●勉強会では21世紀の教師像を何かにたとえてみてくださいとの問いかけがあり、参加者から「母なる大地」「お釈迦さまの手」などいろいろな回答がありました。この質問を聞いたとき、私の頭に浮かんだのは「風」でした。風は目には見えないけれど、植物の種を運び、運ばれた種は芽を出し根を張り、なかには大きな木に育って実を結ぶものもあります。『好朋友』を使って日本語のクラスを担当する先生たちが風を起し、『好朋友』で日本語を学んだ生徒たちが、さまざまな言語や文化が共生するこれからの社会で人間関係を温暖化できる力をもった人に育っていく……。

●5名の先生方にはこれから、自ら名付けた「好朋友宣伝隊」として、研修会などさまざまな場面で活躍していただきます。東北三省の日本語クラスに起こった風が、中国各地に種を運んでいく、2013年度をそんな年にしたいと思っています。

水口君子

編集後記

国際文化フォーラム通信98号

2013年4月

- 発行人 内藤裕之
- 編集人 水口君子
- アートディレクション 鈴木一誌
- デザイン+DTPオペレーション 大河原哲
- 出力・印刷・製本 凸版印刷(株)
- 校閲・校正 天山舎
- 表紙写真 大木茂
(横浜中華街の関帝廟前で撮影)

公益財団法人 国際文化フォーラム

〒112-0013
東京都文京区音羽1-17-14
音羽YKビル3階
Phone: 03-5981-5226
Fax: 03-5981-5227
E-mail: forum@tjf.or.jp
www.tjf.or.jp